

ダニエルの書 - 第百九十号

預言のクレッシェンド：パニウムの戦いと日曜法への前奏曲を解き明かす

Jeff Pippenger

2024-04-20

前回の記事は、次のように述べた段落を含む一節で終わった。「背きはほとんどその限界に達している。混乱が世界を満たし、まもなく大いなる恐怖が人間に降りかかろうとしている。終わりは非常に近い。真理を知る私たちは、やがて世界を圧倒的な不意打ちとして襲う出来事に備えるべきである」。「背き」がその限界に達するのは恩恵期間の杯が満ちたときであり、その限界はアメリカ合衆国においては日曜法の時に到来する。

しかしキリストは、天地が滅びるまで、律法の一点一滴もすたれることはないと言われた。彼が来られたまさにその働きは、律法を高く掲げ、被造の世界と天に、神は義なる方であり、その律法を変える必要はないことを示すことであった。ところがここに、サタンの右腕が、サタンが天で始めた業、すなわち神の律法を改めようとする業を引き継ぐ用意をしている。そしてキリスト教界は、教皇制の申し子-日曜制度-を採用することによって、彼の努力を追認してきた。彼らはそれを養い、やがてプロテスタントがローマの権力に友好の手を差し伸べるまで、それを養い続けるだろう。そのとき、神の創造の安息日に敵対する法律が立てられる。すると神は「地において不思議なわざをなされる」。神は人類の頑なさに対して長く忍耐してこられ、彼らを御もとに引き寄せようとしてこられた。しかし、彼らが不義の分量を満たす時が来る。そのとき、神は行動される。この時はほとんど到来している。神は諸国民の記録をつけておられる。天の書では、彼らに不利な数字がふくれ上がっている。そして、週の第一日を犯す者に罰を科すことが法律となると、彼らの杯は満ちるであろう。『レビュー・アンド・ヘラルド』1886年3月9日。

日曜法の時、アメリカ合衆国はその杯を満たし切ってしまい、国家的背教の後には国家的破滅が続く。私たちが検討している段落は、「背きはほとんどその限界に達している」「そして、まもなく人類に大いなる恐怖が臨む」と述べている。黙示録11章にある「大地震の時」である日曜法の時に、「その都の十分の一が倒れ」「見よ、第三の災いがすぐに来る」、そして「第七の御使いがラッパを吹き鳴らした」。第三の災いは第七のラッパであり、「大いなる恐怖」をもたらしつつ日曜法の時に到来する。その時点で「終わりは非常に近い」、そしてそれは「圧倒的な不意打ち」としてやって来る。さらに、日曜法の時、教皇制にとっても猶予期間の杯が満たされる。というのも、そのとき黙示録18章の第二の声がこう宣言するからである。「わたしの民よ、彼女から出て来なさい。彼女の罪にあずかることのないため、また、その災いを受けないためである。彼女の罪は天にまで積み重なり、神は彼女の不義を覚えておられる。彼女があなたがたにしたとおりに、彼女に報いなさい。彼女の行いに応じて倍にしなさい。彼女が満たした杯には、倍にして彼女に満たしなさい。」

その歴史は日曜法において開かれ、「終わりの日には多くの殉教者が出る」がゆえに、教皇制が「激しい憤りをもって出て行き、滅ぼし、多くの者を根絶やしにする」象徴的

な時期を画する。教皇制を激昂させるのは「東からと北からの知らせ」であり、それは「彼を悩ませる」が、「彼はその終わりに至り、だれも彼を助けない」。日曜法から教皇制の終焉まで、神の執行の裁きの第一段階が始まる。それに続く第二段階が最後の七つの災いであり、やがて千年期の終わりに悪者たちの永遠の滅びが来る。神の執行の裁きの歴史は、戦争という文脈の中に置かれている。

私たちは重大で厳粛な出来事のとば口に立っている。預言は成就しつつある。不思議にして波瀾に富む歴史が天の書物に記されつつある。私たちの世界のすべてが動揺している。戦争と戦争のうわさがある。諸国民は怒り、死者がさばきを受ける時が来た。出来事は移り変わり、速やかに近づく神の日の到来へと向かっている。いわば、残されているのはわずかな時だけである。しかし、すでに国は国に、王国は王国に対して立ち上がっているが、今はまだ全面的な交戦には至っていない。なお四方の風は、神のしもべたちが額に印を受けるまで、押さえられている。そのとき、地上の諸権力は最後の大きいなる戦いのために軍勢を結集するだろう。Christian Service, 50, 51.

神は十四万四千人に印を押し、それからご自分のほかの群れをバビロンから呼び出される。そして、そのほかの群れもまた神の印を受けるが、十四万四千人とは対照的に「大群衆」として表されている。先の引用で見るべき要点は、「神のしもべたちが額に印を押されるまで、四つの風は押さえられている」ということである。日曜法の時点で十四万四千人はすでに印を受けており、「見よ、第三の災いがすぐに来る」。しかし、神のほかの群れの最後の者が印を受けるまでは、四つの風が完全に解き放たれることはない。

「諸国民はいま怒りを募らせているが、私たちの大祭司が聖所での御業を終えられるとき、彼は立ち上がって復讐の衣を身にまとい、その後、最後の七つの災いが注がれる。私は、四人の天使が、イエスの御業が聖所で終わるまで四つの風を押さえているのを見た。そして、その後、最後の七つの災いが来る。」Review and Herald, 1849年8月1日。

私たちが「瀬戸際に立っている」とされる「偉大で厳粛な出来事」は、「戦争と戦争のうわさ」として表されている。それは、「この世界のあらゆるものが動揺し」、国々が「すでに国に対して立ち上がっている」ときに起こるものとして描かれている。パニウムは、ダニエル書第十一章15節にある「奇異にして出来事に富む歴史」を表しており、それが16節へとつながり、すなわち日曜法へと至る。そこで、「地上のすべての勢力」が最後の決戦のために兵力を結集する「総力戦」が始まる。その「最後の決戦」は第三次世界大戦であり、紀元前31年のアクティウムの戦いによって表されている。

ダニエル書11章の1節と2節、そして10節から15節は、40節に隠された歴史を表している。40節は、1798年から1989年に至るアメリカ合衆国とアドベント主義の歴史を示す。その後は、アメリカ合衆国が聖書予言における第六の王国として終わりを迎えること、そして日曜法である41節（同時に16節でもある）においてラオデキア的なセブンスデー・アドベンチスト教会が吐き出されることに至るまで沈黙している。1節と2節は、1989年の終わりの時を特定し、その時点から、悪魔的なグローバリストたちを煽動する六人目の富裕な大統領に至るまでのアメリカ合衆国の大統領たちを示す。2節は歴史を2016年のドナルド・トランプの当選まで進め、続く3節は、アレクサンドロス大王に代表される十人の王、すなわち聖書予言における第七の王国の歴史を取り上げ、やがて来る日曜法の危機に

において彼らが自分たちの王国を教皇権に与えることを扱っている。

第十節は、1989年を終わりの時と示して締めくくられ、第十一節と第十二節はウクライナでの戦争を取り上げ、プーチンとロシアが戦争に勝利するが、その勝利によって利益を得ることはないと示している。ウクライナ戦争は2014年に始まり、トランプの最初の選挙運動が始まる1年前である。これらの節は、ドナルド・トランプが三度目の選挙運動を開始し、第八の大統領（すなわち七のうちの一人）となるべく（政治的に）復活することへとつながっている。第十三節は、第十五節におけるパニウムでの勝利に先立つトランプの政治的な苦闘を示し、第十四節は、第十五節での彼の勝利に至るまでのパニウムの戦いの最中に起こる歴史、すなわち不法の人が公然と政治史に介入し始める時期の歴史を扱っている。教皇制が預言の歴史に介入すると、ツロの淫婦が歌い始め、ビジョンが定まる。

紀元前200年のパニウムでの勝利に続き、紀元前167年にはモデインにおけるマカバイの「反乱」（抗議の意）が道標となった。紀元前164年にはマカバイが神殿を再奉献し、アンティオコス・エピファネスが死去して、ギリシアの宗教的影響に対するマカバイの闘争の転機となった。紀元前161年から158年の期間に、同盟締結に向けた動きが開始され、最終的に締結された。予言的な道標は、ハスモン朝において、15節から23節の歴史の中で繰り返される。

23節のローマとの同盟は直接的な言及だが、15節では、紀元前167年、164年、161年、158年というマカバイの四つの節目は、「同盟」の歴史をその節に当てはめて初めて見えてくる。16節でポンペイウスがエルサレムを征服したとき、彼は市内で進行していた内戦に直面し、対立する二つの勢力はいずれもハスモン朝の分派であった。したがって、マカバイもまた16節の歴史に含まれている。

20節はキリストの誕生を示し、21節と22節はキリストの死の歴史を指し示している。したがって、その歴史には、パリサイ人に代表されるハスモン朝の系譜が見られる。15節から23節は、文字通りの栄光の地と、神の真理の擁護者であると自称したユダヤの背教の民を特定しているが、彼らは背教的プロテスタント主義が神の代表でないのと同様に、神の代表ではなかった。

ホワイト姉妹は、「『ダニエル書十一章』の成就として起こった歴史の多くは繰り返される」と私たちに教えています。ハスモン朝によって表されている預言の系統は、第六番目に裕福な大統領が挑む三度目の大統領選挙から始まる、プロテスタントの背教の角を描き出す預言の系統を表している。トランプは大統領選に三度出馬し、最初と最後の出馬では勝利するが、二度目は、十三という数で表される反逆が、2020年の盗まれた選挙を指し示す。そのとき世界は二つの階級に分けられ、一方の階級は2020年が見えるが、もう一方の階級は盲目である。これは、獣の像の形成において、アドベンチストにとっての恩恵期間の終結に先立つ大いなる試練を象徴している。

すでに準備は進み、獣の像を作ることにつながる動きが進行している。地上の歴史の中で、この終わりの日々に関する預言の言葉を成就させる出来事がもたらされるだろう。レビュー・アンド・ヘラルド誌、1889年4月23日。

進展している「準備」、現在「進行中」の「動き」、そして「獣の像を造ることになり、この終わりの日々のための預言の予告を成就させる」出来事は、ダニエル書11章15～23節に見られるハスモン朝の道しるべを含んでいる。背教的プロテスタントを代表する背教的ハスモン朝は、新世界秩序のウォークイズムに対抗して自身のMAGAイズムを煽動し展開する、共和党の第6代および第8代大統領ドナルド・トランプの証言に織り込まれている。

ダニエル書11章2節において、トランプの証しは2020年にまで及び、彼の選挙戦と最初の任期を含んでいる。続く13～15節は、彼の三度目にして最後の選挙戦と勝利、そして最後の任期を示している。二つの任期の間については、黙示録11章が、共和党の角が打ち殺され、三日半のあいだ通りに死体のまま横たえられたことを示している。こうしたトランプの歴史の筋が、ダニエル書11章において彼の大統領職の始まりと終わりを結び付けている。ゆえに、ドナルド・トランプの証しはダニエル書と黙示録の双方に見出され、いずれも11章に位置している。

三つの部分的な線を結び合わせると、トランプの第六代と第八代大統領としての全史が明らかになり、また、それらは『真理』という署名に基づいて構成されている。それらはダニエル書と黙示録に由来し、『終わりの日々に関するダニエル書の部分』と一致する歴史の流れを生み出す。

ダニエル書のその部分は、恩恵期間の終結直前にユダ族の獅子によって封印が解かれるものであり、したがって十四万四千人の封印のメッセージの一要素である。しかし、2020年に二人の証人が殺されるという預言的な道しるべを見抜くには、霊的な20/20の視力が必要である。

ダニエル書11章15節は、パニウムの戦いとハスモン朝の系譜を表しており、それは文字通りの戦いによって成就した。したがって、背教的プロテスタントの宗教とグローバリストのニューエイジの宗教との間の霊的戦いを、預言的に描き出す象徴となっている。紀元前200年に起こったパニウムの戦いは共和の角の戦いを表し、マカバイの反乱によって示される闘争は背教的プロテスタントの角の戦いを表している。マカバイの反乱は紀元前167年に起こったが、預言的には紀元前200年の共和の角の戦いと符合する。というのも、預言的に見ると、角同士の歴史が互いに並行しているからである。

第十五節は、まもなく到来する日曜法の直前にあり、それへと導く預言的歴史を表している。したがってそれは、封印のメッセージに内在する力が神の終末の民に永遠に印を押す、十四万四千人が封印される時期のまさにその時点を表している。

その真理の封印を解くのはユダ族の獅子であり、その真理とはイエス・キリストの啓示である。十四万四千人とは「小羊がどこへ行かれるにも従う」者たちであり、彼が十五節の封印を解かれるとき、ユダ族の獅子はすでに終わりの日の民をパニウムへ導いておられる。イエスは、十字架の直前に弟子たちをパニウムへ連れて行かれたとき、封印の過程においてまさにこの点を示された。

パニウムの戦いは、キリストが弟子たちとともにパニウムに立ち、弟子たちに、ご自身の教会はペテロの告白の上に建てられること、そして「地獄の門」もそれに打ち勝つこ

としないことを教えられたときに、特に言及された。イエスは、パニウムの戦いによって表される戦いを示された。十五節がパニウムの戦いで、十六節がアクティウムの戦いである。キリストは、ご自身の死の出来事が展開する直前に、パニウムに立っておられた。

パニウムから日曜法に至るまでの期間は、地の獣の二つの背教的な角であるプロテスタント主義と共和主義の政治的・宗教的闘争の歴史である。両者とも2020年に底なしの穴から上ってきた無神論的な獣の攻撃を受け、グローバリズムの政治的・宗教的な神々に対する二本の角の戦いは、11節から16節の歴史の中に表されている。

2014年に始まったウクライナ戦争から、2015年に始まったドナルド・トランプの最初の大統領選挙運動、2020年の二つの角の死、2023年の復活、そして2022年11月15日に始まったトランプの三度目の選挙運動へと続くこの歴史は、十三節から十五節へと導いている。これらの節において、神の預言の言葉によって明らかにされる歴史は、十四万四千を封印する預言的真理を表している。

それらの真理は、マタイの福音書16章と17章におけるキリストのカイサリア・ピリピ訪問の中に示されている。これらの聖句では、不法の人がツロの淫婦の歌を歌いながら預言の歴史に再登場し、こうして幻を打ち立て、それらの聖句を真夜中の叫びという文脈に位置づけている。というのも、幻がなければ民は滅びるからである。

啓示がないところでは、民は滅びる。しかし、律法を守る者は幸いである。箴言 29:18.

目がありながら見ようとせず、耳がありながら聞こうとしない者たちは、「油」を持たない愚かなラオデキヤの乙女たちである。「油」とは、猶予期間が閉じられる直前にイエス・キリストの啓示の封印が解かれるときにもたらされる知識の増し加わりのことであり、ホセア書によれば、知識を拒み退ける神の民は滅ぼされる。

わたしの民は知識がないために滅ぼされる。あなたが知識を退けたので、わたしもあなたを退け、あなたをわたしの祭司とはしない。あなたが自分の神の律法を忘れたので、わたしもあなたの子らを忘れる。ホセア書4章6節。

主の言葉がまた私に臨み、こう言われた。「人の子よ、あなたは反逆の家のただ中に住んでいる。彼らには見る目があっても見ない、聞く耳があっても聞かない。彼らは反逆の家だからである。」エゼキエル書 12:1, 2

彼は言った。「行って、この民に告げよ。『聞け、しかし悟るな。見よ、しかしわきまえるな。』この民の心を鈍らせ、その耳を重くし、その目を閉ざせ。彼らとその目で見、その耳で聞き、その心で悟って、立ち返り、いやされることのないように。」イザヤ書 6:9, 10.

弟子たちが近寄ってきて、彼に言った。「なぜ彼らにはたとえでお話しになるのですか。」彼は答えて言った。「あなたがたには天の御国の奥義を知ることが与えられており、彼らには与えられていないからである。持っている者には与えられて、いよいよ豊かになり、持たない者からは、持っているものさえ取り上げられる。だからこそ、わたしは彼らにはたとえで語る。彼らは見えても見ず、聞いていても聞かず、また悟らないからである。彼らには、こう言われたイザヤの預言が成就している。『あなた

がたは聞くには聞くが、悟らず、見るには見るが、認めない。』この民の心は鈍くなり、その耳は聞くのに鈍く、目は閉じてしまっている。それは、彼らがいつでも目で見、耳で聞き、心で悟って立ち返り、わたしが彼らをいやすことのないようにするためである。しかし、あなたがたの目は見ているゆえに幸いであり、あなたがたの耳は聞いているゆえに幸いである。まことにあなたがたに言う。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願いながら見られず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら聞けなかったのである。」マタイによる福音書 13:10-17

1840年から1844年に与えられたすべてのメッセージは、今こそ力をもって示されるべきである。多くの人々が方向を見失っているからである。これらのメッセージは、すべての教会に届けられなければならない。

キリストは言われた。「あなたがたの目は見ているので幸いです。また、あなたがたの耳は聞いているので幸いです。まことにあなたがたに言います。多くの預言者や義人たちは、あなたがたが見ているものを見たいと願いながら、見ることができず、あなたがたが聞いていることを聞きたいと願いながら、聞くことができませんでした」[マタイ 13:16, 17]。1843年と1844年に見られた事柄を見た目は幸いです。

「そのメッセージは与えられた。そして、時のしるしが成就しつつあるゆえに、そのメッセージを繰り返して伝えることに遅れがあってはならない。終結の働きは成し遂げられなければならない。大いなる働きが短期間に行われるであろう。まもなく、神の定めにより、大いなる叫びへと膨れ上がるメッセージが与えられるであろう。そのとき、ダニエルは自分の分に立って、証しをするであろう。」原稿公刊集 第21巻 437頁。

次回の記事でこの研究を続けます。

イエス・キリストの啓示。これは、まもなく起こるべきことをそのしもべたちに示すために、神が彼にお与えになったものである。神は御使いを遣わし、これをそのしもべヨハネに示された。ヨハネは、神のことばとイエス・キリストの証し、また自分が見たすべての事柄について証言した。この預言のことばを朗読する者、またこれを聞き、その中に書かれていることを守る者たちは幸いである。時が近いからである。ヨハネの黙示録 1:1-3